【１年国語】「叙述から想像する」を支える
指導者：鎌田　雅子

研究の実践
１　単元「すきなところを見つけよう～たぬきの糸車～」
２　授業の実際
(1) 場面の様子を再現する
「きこりの夫婦」「糸を紡ぐ」「破れ障子の穴」と、子どもの生活経験とかけ離れた場所で「たぬきの糸車」の物語は進んでいく。個々にもっている知識や経験を引き合いに説明し合ったとしても、イメージするのは難しいと考えた。そこで、物語では描かれていない部分を具体化したり、場面の様子を再現したりする活動を取り入れた。
きこりがわなを仕掛けた理由を回数に着目して考える子どもたち。そこで「命を奪うためにわなを仕掛けられるなんて、一体たぬきはどんないたずらをしたのだろうね？」と問いかけた。本文の「まいばんのようにたぬきがやってきていたずらをした」を具体的に読むためである。「家の中に入って、食べ物をもっていったのかも。」「家の中を荒したんじゃない？」と発言が続く。ふとA児が「家の中だけじゃなく、例えばきこりが売ろうと思って積んでいた木とか・・・。」と発言した。みんなで「きこり」はどんな職業なのかを確かめたこととつなげた姿だった。その後、子どもたちは、「場所」「時」「人」の設定とつなげて、いかにたぬきのいたずらがきこり夫婦にとって許しがたいものだったかを説明していった。「たぬき＝かわいい」とおかみさんに同化していた子どもたちが出会い前に戻る時間となった。
この物語最大の難所は、おかみさんが見た糸車を回すまねをするたぬきを想像することである。子どもたちは最初「おかみさんはなぜふき出しそうになったのかな」という問いに、「くりくり」「くるりくるり」の言葉の印象を根拠に考えた。「『吹き出す』は、笑うのを我慢できなくて思わず出ちゃう感じ。」という子どもたちの解釈と、たぬきの行動の滑稽さ、愛らしさをつなげたいと考えた。そこで「おかみさんの部屋を作ろう」と提案する。「たぬきとおかみさんの出会いは夜なんだね？じゃあ、電気を消して暗くしないとね。」いつもの動作化とは違うと察した子どもたちの静かな興奮が伝わってくる。障子を貼ったつい立ての登場と同時にB児が「だから月のきれいな晩じゃないとだめなのか」とつぶやく。子どもの気付きを引き出しながら、黄色のセロファンを通して障子を照らし、障子に穴を開けた。順番にたぬき役になり、場面を再現することを繰り返す中で「手は回っているけど目が回っていないよ。」などと演技指導が入る。「手と目を一緒に動かすのは難しい」というたぬき役の発言に「たぬきはそれくらい集中して見ていたんだ」と新たな発見が付け加えられた。もう十分おかみさんの目線を確かめたと教室の電気を付けたとき、おもむろにC児が手を挙げた。「同時だから面白いんだと思います」「どういうこと？」思わず問い返してしまった。私自身想定していない読みだった。「全部が同時だからもっと面白いんだ」「しかも自分の動きと合っているし」とC児の発言の意味を理解し、大発見だと教室が活気付く。言葉への知識や生活経験だけでなく、叙述を鮮やかに映像化する多様な方法を知ることは、友達と読み深めることを楽しむ姿を引き出す手立ての一つとなると実感した。

(2) 様々な考えに触れ、自分を見つめるホットシーティング
道徳科で役に成り切って質問に答える活動（ホットシーティング）を行うと、多面的に言動の理由を出し合いながらも、自分が大事にしたい理由を選ぶ姿が見られた。様々な読みを表現しながら吟味する姿を引き出す手立てとして、国語科の学習でも取り入れてみようと考えた。
まずはグループでおかみさん役に「どうしてたぬきを逃がしたの？」と投げ掛け、それに答える活動を行った。「心のトンネル（全体）」では、たぬきを逃がした理由を自問自答するおかみさん役に、グループで出たみんなにも知らせたい考えをつぶやくことにしていた。D児は「もうしないでねと言い聞かせたらいいんじゃない？」というおかみさんの心の声をつぶやいた。これまでも「まだ他にもある」と一見奇をてらった発言をすることが多く、周囲に「それはちょっと・・・」という反応をされることが多かった。しかし「かわいいいたずら（もんのたぬき）を自分で食べるなんて・・・」という友達の発言の意味を全体に問い返すと、D児は「いたずらもするけど、かわいくて、食べたらまねをしてもらえなくなるから逃がしたと言っている。」と自分の言葉で言い換えた。なるほどという周囲の反応の中、「Dさん、さっき『いたずらしないでと言い聞かせる』と言っていたけれど、いたずらしてもかわいいの？」と切り返した。「うん。いたずらしても。『いたずらもんだがかわいいなぁ。』って書いてある。」とうれしそうに語るD児。その後、おかみさんのたぬきへの気持ちの変容を説明するときにも「やっぱり『いたずらもんだがかわいいなぁ。』だよ。」と何度も繰り返した。おかみさんの心情と着目すべき叙述がD児の中で結び付いたことを実感すると同時に、D児の気付きが全体にも広がっていくのを感じた。

今回の実践を通して、グループで間違いも含む多様な考えに触れ、「心のトンネル」を通る友達に自分が選んだ解釈を投げ掛けたり、様々な発言を聞いたりする中で、個々に静かな解釈の選択・決定が進むと感じた。そして、一人の考えの変容の瞬間が、協働の学びを進めるきっかけになることを目の当たりにした。教師の問い返しだけでなく、友達の質問に答えたり、「さっきまで○○と思っていたんだけれど・・・」と自分から切り出したりすることで変容を自覚する場面が増えることが、読みが深まることを楽しむ姿を引き出していくと考える。